



『図書館大会』-第92回全国図書館大会岡山大会雑感-

大橋 亜紀子

「今度、図書館大会に行ってきます」というと、図書館関係以外の人には、まず「(何それ)?」という顔をされます。聞きなれている者にとっては何ということのない言葉ですが、馴染みの無い人には図書館の職員が集まって運動会でもするのか?というイメージを持たれてしまうようです。その度に説明に苦慮している訳ですが、2006年は岡山にて「晴れの国岡山から未来へ向けで: 広げよう図書館の可能性」というテーマの下で、10月26日(木)~27日(金)の2日間にわたって開催されました。私が現在勤務している豊田高専図書館の場合は、毎年館長と図書館職員一名が参加しており、今回参加することができましたので、雰囲気なりとお伝えできればと思います。

図書館に勤務する方々をご存知のとおり、全国図書館大会は、公立図書館、学校図書館等全ての図書館関係者が館種を超えて一堂に会し、報告発表を通じて図書館の現状と課題を明らかにするとともに、研究協議を行い、図書館活動の一層の充実発展に資することを目的としています。主催は日本図書館協会及び開催県、そして文部科学省等の後援で行われます。一昨年に参加した時には3日に渡って開催されていたのですが、昨年からは2日間で、1日目は全体会で基調講演と記念講演、2日目に各分散会に分かれて開催されています。

開会式は、岡山シンフォニーホールで午後一時から行われました。初めに「オープニングサプライズイベントがあります」との案内があり、岡山朗読塾のメンバーによる「笠地蔵」「若返りの水」の朗読がありました。一昨年に参加した時には、そんなものは無かったので最初は何事?と思ってしまいましたが、「まんが日本昔ばなし」や給食の時間に流れていた「おはなしでてこい」を思い出し、しばし懐かしい気分になりました。

基調講演では、日本図書館協会理事長、塩見昇氏より、近年の図書館界の動向についての報告がありました。

(次頁へ)

[目次]

『図書館大会』-第92回全国図書館大会岡山大会雑感-	...	1
続京大図書館史こぼれ話 第八回	...	3

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール: dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL: <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

まずは指定管理者制度について、文部科学省や日本図書館協会の調査では、他の公の施設に比べて図書館には導入が少ないという報告があり、「初めに導入有り」ではなく、丁寧に検討すれば、良い方策ではないことがわかってきている。6月6日の行革担当大臣の答弁では、「図書館は地域や国の宝であり、これを守り充実していくことは社会的な務め」とあり、市場原理ですすんできた行政の姿勢にも、微妙な変化が見られる。

国立国会図書館の独立行政法人化について一時期話題になったが、この問題は「収集・保存・立法図書館としての図書館を、国が直接責任を持って行う必要があるかどうか」ということであり、より広い場で深い議論が必要である。

また、大学と公共との連携が進み、地域への貢献が広まっている。機関リポジトリの動きも、情報格差を少なくしようという取組ともとらえられる。図書館という基盤を共有することで、機会・利益を共有し、格差社会のひずみを埋める、挑戦のシステムということもできるだろう、との講演がありました。

記念講演では、児童文学作家のあさのあつこ氏より「物語の日々」と題して、岡山県美作市で暮らす日々や、作家としての生活についていろいろなお話がありました。

中学生の頃に、ある一冊の本に出会い、それまでまるで本を読まなかった自分が、どんどん読むようになった。美作は田舎のため図書館や本屋などの読む環境が無かったのが、それまで読まなかった原因だが、その本に出会ったおかげで、本は面白いこと、世の中は広く、知らない世界があること、本を読み、書くことを知って、自分は生き抜くことができた。その力を若い人に伝えたい。少年少女が加害者・被害者になる事件が多発しているが、人を殺したり、殺されたり、自分を殺したりしなくてもすむ一冊があるはず。そのような本と出会う場を作ってあげるのが図書館の仕事であり、若い人には、本を選べる場所が必要不可欠、という講演がありました。

軽妙な語り口で、時折冗談を交えながらお話される姿を見て、作家さんてすごいなーと感心することしきり。今回参加する前に、勉強にと思って一冊だけ読んだ時にはあまり興味が湧かなかった（失礼！）のですが、すっかりあさのさんにはまってしまいました。その後サイン会があるということだったので、「バッテリー」第一巻を買って列に並ぼうとしたのですが、既に階段まで人がいっぱいだったので、諦めました。

記念講演が終わった後は、大会日程としては交流会があるのですが、高専図書館では自主勉強会「高専図書館情報交換会」が別会場で持たれるため、そちらの方へ移動。ホテルの会議室をお借りして有志が集まり、高専図書館の具体的な業務内容に関して、現状と課題について、意見交換を行いました。

2日目は第2分科会「大学・短大・高専図書館」へ参加しました。こちらは「高めよう！学生の図書館利用満足度」というテーマの下、午前中は全体会、午後は大学・短大分散会と高等専門学校分散会に分かれて報告が行われました。

全体会基調講演は、立教大学の牛崎進氏より、「学生への図書館サービスの点検と再構築」とのテーマで講演がありました。

戦後からの図書館の歴史を振り返ると、教育学問における図書館の有意性の認識が共有されていなかった。また、司書としても専門的な目録・資料保存の知識ばかりであり、企画・マネジメント能力に欠けてきたことも問題であった。現状について、どのようにやり過ごすか、ではなく、大変な時代だが、面白い仕事が降ってきたと思って取り組むことが必要である。学生の満足度を高めるために、図書館はどのように受け入れられているかを分析、サービス目標の数値化を行った上で、図書館を学生の情報源とするために教員と連携したサービスの強化・ハード環境の整備・充実、広報などを行っていく必要がある、と論ぜられました。

大変分りやすく面白いお話だったのですが、私自身にとってはちょっと耳の痛い部分もあり、常日頃から意識して仕事をするのが大切なのかな、と改めて感じました。

基調発表は「大学図書館の使命とアウトカム評価」というテーマで、文教大学湘南図書館の戸田

あきら氏から講演がありました。大学図書館として期待されるアウトカムは「図書館を利用した結果、学習が進み学習成果があがった」ということであり、その評価の仕方にはいくつかの方法がある。明確な検証済みの方法はまだ無いが、アウトカムが確認されなければ、その機関は成功しているとは言い難いため、図書館の存在意義を示すにはアウトカム測定が必要となってくる。とありました。

午後からは、高専分散会が開催され、情報リテラシー教育の重要性や、情報社会における高専図書館の方向性などについての報告が行われました。

図書館大会の全体プログラムは以上で終了ですが、高専の場合は「高専懇親交流会」がこの後開催されました。ホテルで中華料理を頂きながらの交流会でしたが、大会に参加したほとんどの高専の図書館長と事務職員が参加しているため、教員サイドの意見なども多く聞くことができ、貴重な機会でした。

その懇親会も9時前には終了し、これで、図書館大会終了かと思いきや、ホテルに戻ってから無料サービスのコーヒーを片手に、お土産用に買ったお菓子をつまみつつ、他高専の方々とロビーでお話。公共図書館の巡回バスの順路に組み込んでもらって相互貸借を行っている高専や、近隣の高専図書館職員を集めて会議を行っている地区など、本校では取組む事のできていない活動を行っているところも多く、色々と参考になるお話を聞くことができました。他にも北陸の高専は雪下ろし予算の調整が大変だとか、岡山空港に飛ぶ飛行機は一日一本しかないから来るのが大変だったとか、赤米を作ってみた(!)とか、取り留めの無い話を深夜まで続けていたのです。

盛大に終わった図書館大会ですが、内情は厳しいようで、来年は引き受ける県の都合がつかず東京で行うとのことでした。いつもは週末にあわせて開催するのですが、月・火曜日に開催して、関連行事をその前の土日に行いたいと考えているので、何か企画などがあれば是非お願いします、という話を開会式の時にされていました。

高専の図書館職員にとっては、他高専の人と顔合わせする場があまりないので、図書館大会はそれなりに有益な場所だと思のですが、大学の図書館職員にとっては、参加する意味が見出しにくい所があるかもしれません。どちらかといえば内容も公共図書館よりです。ただ、大学図書館もこれから地域への連携に一層取組んでいく中で、公共図書館の現状を把握し、連携していくことも重要だと考えます。現状のように、出席者名簿を見ても主だった大学図書館からの参加者がほとんど見当たらないのでは、少し寂しい気もします。

以上、図書館大会に参加しての雑感、でした。

来年は、10月29日(月)・30日(火)、日比谷公会堂と国立オリンピック記念青少年総合センターで開催予定とのこと。機会があれば、是非どうぞ。

おおはし あきこ(豊田工業高等専門学校図書館)

続京大図書館史こぼれ話 第八回

京大草創期、図書館を巡って起った対立事件 その5

廣庭 基介

上記の会話によって、法科大学は、島館長に対して、将来開設予定の文科大学のための図書費として2,000円を貸すことを決して望ましいものではないと考えていたことが、単なる憶測ではなかったと理解出来ます。それどころか、完全に不満の種になっていたのです。

ここまで分かったことで、重要な点が幾つかあります。一つは、従来から、東大と京大には分館制度が無かったことになっておりましたが、明治36年7月には、京大法科大学図書分館という分館があった、という事実です。この分館は、太平洋戦争の終戦後、大学所属の図書が物品管理法の適用を受けた際、京大が全学の図書の物品管理官を附属図書館の事務長（後に事務部長）とし、各学部や研究所などの図書の物品供用官（学部長・研究科長等）が供用するという中央集中方式を採用したため、法学部分館の名称も消滅して、他の学部と同様になりましたが、先に述べた昭和18年に発行された『京都帝国大学史』の「法学部」編には、「法学部図書分館」の存在が記されています。

もう一つの重要な事項は、後で返済したとは云え、文科大学が未設置の段階で、東大文科大学出身の島館長が、「大惣本」の購入に際して、法科大学から2,000円という大金を借りてまでして、やっと購入出来たという事実です。島館長は、「法科の奴」などと下品な言葉を発していますが、確かに現在に至るまで、「大惣本」の利用者の殆どは文学部関係者で占められていることを考えれば、こんな言葉を口にするのはちょっと罰当たりの感なきにしもあらずではないでしょうか。そして、その購入に当たって、法科大学は決して諸手をあげて賛成した訳ではなく、不本意ながらではありましたが、それでも結局はしぶしぶ協力したという事実が現在では忘れられているという事です。今日では、「大惣本」の購入を誰が決断したものか、明らかではありません。近い将来開設される文科大学の国文学科の不可欠の資料となるに違いないと確信していたのか、或いは初期の附属図書館の蔵書数稼ぎの意味もあったものか、それも島館長が強く望んだものか、木下総長の決断によったものか、いずれにしても、現在では仮に予算がいくらあっても、同じ書物をこれだけ多数掘り出してくることは不可能でしょうから、大した判断をしたものだと感心するほかありません。

ここで「大惣本」の簡単な解説を述べておきます。「大惣」とは「大野屋惣八」の略称です。大惣は江戸時代中期の明和4（1767）年に名古屋の町の真ん中で貸本業を開始した店で、この店の家訓の一つに「一旦、当家に入った書物は、如何なる事情があっても、決して他へ売らない」という条項があり、そのために、蔵書は増える一方で、幕末期から明治初期にかけて、当店を頻りに利用した坪内逍遙や水谷不倒その他の利用者達が、3棟の土蔵に書物がぎっしり詰まっていたと語り伝えています。（『逍遙選集』第12巻「歌舞伎の追憶」p.179～185, 190～196:「貸本屋大惣 其の1、其の2」春陽堂、昭和2）

江戸時代当時の貸本屋の規模については大惣店以外の店のことが殆ど研究紹介されていませんので、断定することは出来ませんが、古くは滝沢馬琴や坪内逍遙、近くは初代NDL館長金森徳次郎などが大惣店を訪れ、大抵の図書館史、書誌学研究者が大惣を江戸時代のわが国最大の貸本屋と称揚していますから、巨大貸本屋であったことは間違いないでしょう。

大惣の「大」は、この店の主人である江口氏が、知多郡大野町（現在の知多郡常滑市）の出身であったことに因んだもので、「惣」は、代々の当主が「惣八」を名乗ったことに因んだということです。明和以前は貸本屋ではなく、米屋、質屋、造り酒屋などを営んでいたのですが、代々の当主が書物好きで、家業よりも書物集めが好き、という者もあって、最初は同好者の間で自慢しあったり、貸し借りをしていたということです。住所も舟入町（享保年間）、樽屋町北側（宝暦4年）、西枇杷島坂町（宝暦8年）、岐阜本町（明和3年）、名古屋長島町本重町角（明和4年）、伝馬町六丁目長者町角（寛政12年）、田町内長島町五丁目西側と転々しましたが、大惣本に捺印されている蔵書印の多くには、長島町本重町角の住所が記されています。（江口元三談『貸本屋「大惣」を語る』及び『貸本屋「大惣」の今昔』名古屋郷土文化会機関紙『郷土文化』第8巻第1, 2, 4号:昭和27年～28年、貸本文化研究会機関誌『貸本文化』1982年11月増刊号『特集貸本屋大惣』などを参照のこと。蛇足ですが、筆者も『大学図書館研究』第24号に「京大『大惣本』購入事情の考察」を発表し、昭和60年度国立大学図書館協議会賞を頂戴しました。

（つづく）

ひとにわ もとすけ（元京大図書館員）

会費の納入をお願いいたします。口座番号：01090-4-5904、加入者名：大学図書館問題研究会京都支部